マナビエ
MANABIE

記述の設計図　第3部 組み立てる

U07　文にする（主語述語・指示語と比喩・具体例・文末）

アドバンス

対象：高校2年・偏差値50

1. 要点（ルール）
2. 例題　評論「からだで聴く」
3. 練習1・練習2（解答らんつき）
4. 解答と採点表

要点　文にするときのルール

R07-1　判定表：本文の言葉か、自分の言葉か

原則は本文の言葉（本文主義）。自分の言葉に言いかえるのは3つのときだけ＝①指示語 ②比喩（たとえ・慣用句）③具体例（例・セリフ・名前のならび）。言いかえに使う語も、まず本文中の抽象語からさがす。

R07-2　指示語は範囲を決めて代入

評論の「こうした」「この関係」は、段落全体を指すことがある。範囲を決めて代入し、意味が通るかを確かめる。指す中身がたとえや具体例なら、さらに言いかえる（二重の言いかえ）。

R07-3　比喩は「何を何にたとえたか」に分ける

たとえられているもの（本体）と、似ている点を書く。評論では、本文の抽象語（言葉にならない・必要とされるなど）で言いかえる。

R07-4　具体例は筆者のまとめで抽象化

例の前後にある筆者のまとめ（つまり・このように・〜に共通するのは）をさがして使う。「具体的に」の条件があるときは例を入れる。言いかえたら本文にもどり、意味が変わっていないかを確かめる。

R07-5　主語と述語

「〜は」と文末だけをつないで読み、ねじれを点検する。主語が二つ入るときは、どちらの文かを決める（長くなれば U08 で分けて書く）。

R07-6　文末は最後の確認

先に中身が言いかえになっているかを見る。そのあと、どういうことか→「こと。」／なぜ→「から。」／どのようなものか→「もの。」（聞かれた言葉で終える）。

R07-7　設問の条件で判定表を調整する

「本文の言葉を使って」＝抜き出しではなく、つなぎ直す。「自分の言葉で」＝――線部の語や比喩を別の言葉にする（本文のふつうの言葉まで言いかえなくてよい）。「〇〇という語を使わずに」＝その語を答えに入れない。「具体的に」＝例を入れる。

ルールの番号（R07-〇）は、講座全体の通し番号です。動画・Webページ・このPDFで同じ番号を使っています。

例題　評論「からだで聴く」

① 私たちはふつう、聴くことを耳のはたらきだと考えている。相手の話す言葉を耳で受けとり、頭でその意味を理解する。聴くとは、言葉の意味を正しく受けとることだ、と。

② しかし、ほんとうにそうだろうか。電話で話していると、相手の言葉は一つも聞きもらしていないのに、どこか話がかみ合わないと感じることがある。同じ人と向かいあって話せば、すぐに通じあえたはずのことが、電話ではなかなか伝わらない。

③ 向かいあって話すとき、私たちは言葉だけを受けとっているのではない。相手が言いよどむときの息のつまり、ふと目をそらすしぐさ、話しながら少しずつ前のめりになる姿勢。そうしたものを、私たちは意識しないうちに感じとり、思わずうなずいたり、身を乗りだしたり、声の調子をやわらげたりしている。

④ つまり、言葉の意味を頭で理解するより先に、身体のほうが相手のようすを受けとめ、それに応えているのである。その意味で、身体は、もう一つの耳である。

⑤ 生まれたばかりの赤ん坊は、まだ言葉を知らない。それでも、抱きあげる人の腕のこわばりや、胸の鼓動の速さを感じとって、泣きやんだり、かえって激しく泣いたりする。人は言葉を覚えるずっと前から、身体で他人を聴いているのだ。

⑥ ところが、言葉の意味だけをやりとりすることに慣れると、私たちはこの「もう一つの耳」を閉ざしてしまう。文字のメッセージでは、相手の言いよどみも、目のそらし方も伝わらない。速く、正確に用件を伝えるほど、言葉にならないものはこぼれ落ちていく。

⑦ 他人を聴くとは、言葉の意味を受けとることにとどまらない。言葉になる手前で相手が発しているものを、自分の身体ごと受けとめることなのである。よく聴く人とは、耳のよい人ではなく、からだのひらかれた人のことなのかもしれない。

問　――線部「身体は、もう一つの耳である」とはどういうことか。百字以内で説明せよ。

解き方

1. **手順1　判定表で――線部を分ける**
   「もう一つの耳」は比喩→言いかえる。直前の「その意味で」は指示語→④段落の前の文を代入する。③の「息のつまり・しぐさ・姿勢」と⑤の赤ん坊は具体例→抽象化する（R07-1）。
2. **手順2　指示語を代入する**
   「その意味で」＝「言葉の意味を頭で理解するより先に、身体のほうが相手のようすを受けとめ、それに応えている」という意味で。さらに中の「それ」＝相手のようす（R07-2）。
3. **手順3　比喩を分ける**
   本体＝身体。似ている点＝耳のように、相手から発せられるものを受けとる。ただし受けとるのは言葉の意味ではない（R07-3）。

4. **手順4　具体例を抽象化する**
息のつまり・目をそらすしぐさ・前のめりの姿勢＝筆者のまとめ「言葉にならないもの」「言葉になる手前で相手が発しているもの」→「言葉にならない相手のようす」(R07-4)。

5. **手順5　対比を前に置き、文末を確かめる**
①段落の常識「聴く＝耳で言葉の意味を受けとる」を前に置くと、何が「もう一つ」なのかがはっきりする。最後に「～ということ。」を確かめる(R07-6)。

判定表(本文の言葉か、自分の言葉か)

答えに使う言葉	判定と言いかえ	根拠	どうする？
もう一つの耳	比喩 → 言葉にならない相手のようすを受けとる身体	④⑥	◎ 言いかえる
その意味で	指示語 → 頭で理解するより先に、身体が相手のようすを受けとめて応える	④	◎ 代入する
息のつまり・しぐさ・姿勢／赤ん坊	具体例 → 言葉にならない相手のようす	③⑤	◎ 抽象化する
耳で言葉の意味を受けとる	対比(ふつうの考え)	①	○ 百字なら入れる
文字のメッセージでは伝わらない	その後の話(背景)	⑥	△ 入れない

模範解答

模範解答(百字以内)　92字／100字以内
聴くとは耳で言葉の意味を受けとることだと考えられがちだが、実際には、言葉の意味を頭で理解するより先に、身体が言葉にならない相手のようすを感じとり、意識しないうちに応えているということ。

参考:六十字以内なら　58字／60字以内
言葉の意味を頭で理解するより先に、身体が言葉にならない相手のようすを感じとり、意識しないうちに応えているということ。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
比喩の言いかえ:頭で理解するより先に、身体が相手を感じとり、応えている	4点
具体例の抽象化:言葉にならない相手のようす(息づかい・しぐさなどをまとめている)	3点
対比:聴く＝耳で言葉の意味を受けとる、ではない	2点
文末が「～こと。」・主述がねじれていない	1点
合計	**10点**

減点の型（こう書くと）	何点になる？ なぜ？
「身体は、耳と同じように相手の話を聴くもう一つの耳だということ。」	比喩をくり返しただけ（同語反復）。文末が合っていても0点。
「相手の息のつまりや、目をそらすしぐさや、前のめりの姿勢を感じとって、うなずいたりするということ。」	具体例をそのまま写した。何が「耳」なのかがまとまらず、抽象化の3点が入らない。
「その意味で、身体が相手に応えているということ。」	指示語が残っている。どの意味なのかが伝わらず、4点中1点。
「身体がもう一つの耳とは、相手を感じとることだ。」	主語と述語がねじれ、比喩も残る。文末も「こと。」の形でない。
百一字以上	字数超過。採点対象外になることが多い。

練習1　評論「ささえる手、ささえられる手」

① 介護や看護、子育てなど、だれかの世話をすることを、私たちは「ケア」とよぶ。ケアというと、力のある者が、力の弱い者を一方的に支える営みだと考えられやすい。支える側はあたえ、支えられる側は受けとる。その向きは、ふつう、逆にはならないと思われている。

② ところが、ケアの現場で長く働いてきた人の話を聞くと、少しちがった姿が見えてくる。ある看護師は、つらい夜勤のあと、病室のおばあさんに「あなたの顔を見ると、ほっとするよ」と言われて、もう少しこの仕事を続けようと思えたという。祖母の介護をしている高校生は、祖母が自分の名前を呼んでくれるだけで、その日一日をがんばれると話していた。

③ こうした話に共通するのは、支えているはずの人が、じつは支えられている人から、何かを受けとっているということだ。それは、感謝の言葉そのものというより、自分がここにいてよいのだという感覚、自分のしていることに意味があるという手ごたえである。

④ 人は、だれかに必要とされることで、自分の存在をたしかめる。だれからも必要とされない時間が長くつづくと、人は、どれほどものに恵まれていても、生きる張りを失っていく。だとすれば、ケアされる人は、ケアする人に、その「必要とされる」という経験をあたえているのである。

⑤ この関係は、一方通行ではない。支える手は、同時に支えられる手でもある。ケアとは、強い者から弱い者への贈りものではなく、たがいに相手の存在を支えあう、往復の営みなのだ。

⑥ そう考えると、「迷惑をかけてはいけない」と、だれにも頼らずに生きようとすることは、自分を守るように見えて、だれかから「支える」という経験をうばうことにもなりかねない。頼ることもまた、ひとつの贈りものなのである。

問　――線部「この関係は、一方通行ではない」とはどういうことか。八十字以内で説明せよ。

① 判定表を書こう

答えに使う言葉(指示語・比喩・具体例・そのまま)	言いかえ	根拠の段落

② 答えを書こう

									10										20
									30										40
									50										60
									70										80

80字以内(1マスに1字。句読点も1字)

練習2　評論(説明型)「余白」

① 手帳を開くと、一週間の予定が、すきまなく書きこまれている。会議、塾、習いごと、友人との約束。空いている時間を見つけると、私たちはつい、そこにも何かを入れたくなる。何も予定のない時間は、むだに過ごしてしまった時間のように感じられるからだ。

② 会話にも同じことが起きている。相手が言葉につまると、私たちはすぐに次の話題を出したり、気のきいた答えを返したりして、沈黙をうめようとする。会話がとぎれることは、気まずい失敗のように思われている。だれかと向かいあっているあいだじゅう、何かを話しつづけていなければならないような気がして、私たちは、相手の言葉を待つよりも先に、自分の言葉を用意してしまう。

③ しかし、絵や書を見ると、何もかかれていない部分が、かかれた部分と同じくらい大切にされていることに気づく。紙の白い部分があるからこそ、筆のあとがいきいきと見え、見る人はそこに、風や光や、かかれていないものを思いえがくことができる。

④ 人と人とのあいだにも、こうした余白が要る。予定と予定のあいだの、何をするか決まっていない時間に、ふと友人に電話をかけてみたくなる。会話のとぎれ目の沈黙のなかで、相手は、言いかけてやめた言葉を、もう一度さがしはじめる。決められたことでうめつくされた時間からは、そうした思いがけない出来事は生まれてこない。

⑤ 余白は、何もない空っぽの部分ではない。まだ形になっていないものが、そこで生まれるのを待っている場所である。だから、余白をつくるとは、何もしないことではない。何が起きるかを決めずに、相手と自分のための場所を空けておくことなのである。

⑥ すべてを予定と言葉でうめてしまうことは、効率がよいように見えて、じつは、人と人とのあいだに新しい何かが生まれる機会を、先にとりあげてしまうことなのだ。

問　――線部「人と人とのあいだにも、こうした余白が要る」とあるが、筆者のいう「余白」とはどのようなものか。「余白」という語を使わずに、七十字以内で説明せよ。

① 判定表を書こう

答えに使う言葉(指示語・比喩・具体例・そのまま)	言いかえ	根拠の段落

② 答えを書こう

									10										20
									30										40
									50										60
									70										

70字以内(1マスに1字。句読点も1字)

解答と採点表

練習1　評論「ささえる手、ささえられる手」

解き方

1. **手順1　判定表**
   「この関係」は指示語→範囲を決める。「一方通行」は比喩→言いかえる。②の看護師・高校生は具体例→③④の筆者のまとめを使う（R07-1）。
2. **手順2　指示語の範囲**
   「この関係」＝①④の、ケアする人（世話をする人）とケアされる人（世話を受ける人）の関係。④だけを見て「必要とされる関係」としない（R07-2）。
3. **手順3　比喩を言いかえる**
   一方通行＝一つの向きにしか進めない道。ここでは、世話をする人が一方的に支えるだけ、ということ。「ではない」ので、世話をする人も相手から支えられている（R07-3）。
4. **手順4　具体例を抽象化する**
   看護師・高校生の話＝③「自分のしていることに意味があるという手ごたえ」④「必要とされるという経験」。これを答えの中身にする（R07-4）。

判定表

答えに使う言葉	判定と言いかえ	根拠	どうする？
この関係	指示語 → 世話をする人と、世話を受ける人の関係（ケア）	①④	◎ 中身を入れる
一方通行ではない	比喩 → 世話をする人も、相手から支えられている	⑤	◎ 言いかえる
看護師・高校生の話	具体例 → 必要とされ、自分の存在に意味がある手ごたえを得る	②③④	◎ 抽象化する
頼ることも贈りもの	その先の主張（聞かれていない）	⑥	△ 入れない

模範解答

模範解答（八十字以内）　77字／80字以内

ケアでは、世話をする人が一方的に支えるのではなく、世話をする人もまた、相手に必要とされることで自分の存在に意味があると感じられ、支えられているということ。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
比喩の言いかえ:世話をする人も、相手から支えられている(たがいに支えあう)	4点
具体例の抽象化:必要とされ、自分の存在に意味があると感じられる	3点
指示語の中身:ケアの、世話をする人と世話を受ける人の関係	2点
文末が「〜こと。」・主述がねじれていない	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
「支える手は、同時に支えられる手でもあるということ。」	本文の比喩をもう一つの比喩でくり返しただけ。言いかえになっていない。1点。
「看護師がおばあさんの言葉で仕事を続けようと思えたように、〜ということ。」	具体例をそのまま書いた。字数を食い、一般化できていない。3点の部分が入らない。
「この関係はおたがいさまだということ。」	指示語が残り、中身も浅い。2点。

練習2　評論(説明型)「余白」

解き方

1. **手順1　条件を読む**
   「余白」という語を使わずに＝この語を答えに入れない(R07-7)。「どのようなものか」→文末は「〜もの。」。ただし文末は最後に確かめる。
2. **手順2　指示語のわな**
   「こうした」は③段落の「紙の白い部分」を指す。でもそれは絵のたとえ。人と人とのあいだの話に置きかえないと、答えにならない(二重の言いかえ・R07-2)。
3. **手順3　具体例を抽象化する**
   ④段落の「予定と予定のあいだの時間」「会話のとぎれ目の沈黙」＝予定や言葉でうめずに残しておく、何も決まっていない時間や沈黙(R07-4)。
4. **手順4　比喩を言いかえる**
   ⑤段落「生まれるのを待っている場所」は比喩。まだ形になっていない思いや出来事が生まれるのを待つためのもの、と書く(R07-3)。

判定表

答えに使う言葉	判定と言いかえ	根拠	どうする？
こうした	指示語 → ③の紙の白い部分（＝たとえ）→ さらに人の話に置きかえる	③④	◎ 二重に言いかえる
予定のあいだの時間・会話の沈黙	具体例 → 予定や言葉でうめずに残しておく、何も決まっていない時間や沈黙	④	◎ 抽象化する
生まれるのを待っている場所	比喩 → まだ形になっていないものが生まれるのを待つ	⑤	◎ 言いかえる
余白	条件で使えない語	設問	× 使わない

模範解答

模範解答（七十字以内） 68字／70字以内

予定や言葉でうめずに残しておく、何をするか決まっていない時間や沈黙であり、まだ形になっていない思いや出来事が生まれるのを待つためのもの。

採点表

採点表（要素ごとの配点）	点
中身：予定や言葉でうめずに残す、何も決まっていない時間や沈黙	4点
はたらき：まだ形になっていない思いや出来事が生まれる（のを待つ）	3点
指示語「こうした」を絵の話のままにせず、人と人とのあいだのこととして書いている	2点
文末が「～もの。」・「余白」の語を使っていない	1点
合計	**10点**

減点の型（こう書くと）	何点になる？ なぜ？
「何もかかれていない、紙の白い部分のようなもの。」	指示語の中身を③のたとえのまま入れた。人と人とのあいだの話になっていない。1点。
「余白とは、まだ形になっていないものが生まれるのを待っている場所。」	条件違反（「余白」を使った）。「場所」も比喩のまま。採点対象外になることが多い。
「気まずい沈黙をうめるための、気のきいたもの。」	文末は「もの。」でも、中身が本文と反対。0点。

マナビエ
MANABIE

記述の設計図　U07 文にする（アドバンス）

© MANABIE　無断転載・複製・改変・再配布を禁じます